

日記文学の成立―その心理的背景―

沼 波 政 保

はじめに

備忘のために単にメモ的に書き留められたものとはかく、人はなぜ日記を綴るのであるのか。日記を綴ることによって何を求めているのであるのか。このことを考えるために、日記が綴られることの心理的背景について考えてみたい。そしてそれを、『建礼門院右京大夫集』と『とはすがたり』を用いて検証することとする。

一

パスカルの言を引くまでもなく、人間は、物を思い、考える存在である。人間である以上、何も思わず何も考えないでいることはできない。よく、「能天気」な人を指して、「あの人は何も考えていない」などということがあがるが、それは、周りの人から見てそのように見えるだけであって、いかにのんびりと無頓着な日々を送っているように見える人でも、いろいろ思い、考えているのである。人間は、物を思い、考えずにはおれない。物を思い、考えてしまうという、一面では悲しい性ともいふべきものを人間は持っているのである。

それならば、何を思い、何を考えるのであろうか。その内容を時制でいえば、当然のことながら、過去のこと、現在のこと、未来のことである。当たり前のことであるが、この、過去・現在・未来のことを考えるにあたって、それらはそれぞれ単独に考えられるのではない。例えば、過去のことを考える場合、それは、単純に過去のことだけを思い出し考えるのではない。過去・現在・未来のことが絡み合って、はじめて過去のことを思い、考えるのである。

さて、そのように、物を思い、考える存在である人間は、自己についても、いろいろ思い、考える。否、人間の一番の関心事は自己であると言ってもよからう。人間は、誰しも、自己の存在について、思い、考える。自己の存在について考えない人はいない。

そこで、現在の自己のことを考える場合に即して考えてみよう。まず、現在の自己がどのような状況にあるか、どの

ようにして今あるのかと考える。すると、次に、現在の自己はこのようであるが、この現在の自己が存在するに至った過去の自己を思い、考えるのである。すなわち、現在の自己存在を思い、考えるには、必然として過去の自己を振り返らなくてはならない。今の自分があるのには、過去の自分があるからであり、過去からの流れの結果が現在の自分なのであるから、現在の自分をしっかりと把握するには、過去の自分を振り返ることなしには不可能である。

また、そうして捉えられた現在の自己は、将来、どのようになるのであろうかと、自己の未来を思い、考えるのである。現在の自己が過去の自己の確認を通して捉えられた時、自然の流れとして、今の自分はこれから先、どのようになるのであろうかと自己の未来を思い、考える。その場合には、当然ながら、自分の未来はこうであってほしい、こうでありたいと、望みを抱き、夢を思い描くのである。余命いくばくもない最晩年の人ならばともかく、一般には、思い考える自己の未来には夢や望みが描かれるのである。否、いかに余命がほとんどない人であっても、絶望にうちひしがれている人であっても、「一縷の望み」などという言葉があるように、それは小さな小さなことかもしれないが、全く夢や望みを持たないということはありえないであろう。九十代半ばの老人が、周りの人から「百歳までは大丈夫だな」と言われても、なぜ百歳で限るのかと不満顔になるのを、幾例も目にしている。

すなわち、現在の自己存在を思い、考える時、過去の自己を思い、考えることなくしてはできないのであり、また、現在の自己存在を捉えた時、それは自己の未来への望みや夢へと必然的に、思いが及ぶのである。

しかし、これは、現在の自己から過去の自己へ、さらに未来の自己へと単純に次第するようなものではない。例えば、未来を思い描く過程で、その都度、現在の自己を認識しようとし、そのためにその都度、過去を確認するという場合も

ある。この場合には、未来を思い描くために現在の自己を認識しようとする、そのために過去の自己を確認するという図式になる。

むしろ、過去・現在・未来の自己の次第を考えることは無意味なかもしれない。どの時制を考えるにしても、他の時制が絡んでくることは必定なのであるから。承知すべきことは、自己を思い、考えるということは、過去・現在・未来の自己が絡み合ったところでなされるということであろう。

昨日は昨日で、これからの自己を思い、その過程でその都度、現在の自己を認識し、そのためにその都度、過去の自己を確認する。今日は今日で、またこれからの自己を思い描き、そのために現在の自己を認識し、そのためにまた過去の自己を確認する。こういうものが蓄積されていくのである。

一方、人間は、人生をある程度送ると、今までの生きてきた自らの人生を確認したくなる。それが、人生の終盤にかかった時なのか、それともまだ半生を過ぎた時なのかは様々であるけれども、少なくとも、人生の序章を過ぎたばかりの時ではない。ある程度の重みを持つほどに人生を積み重ねた時でなくては、自らの人生を確認したい思いは生れてこないだろう。この思いは、言い換えれば、自らの人生の先がある程度見えて来た時とも言えるだろう。今更人生が何か大きく展開することはありえない。実際にはこれからもし思いがけない展開がある場合もあるが、少なくとも本人には、このまま年齢を重ねてやがて死を迎えるであろうとしか思えないのである。そのように、好むと好まぬとにかかわらず人生の目途がついてしまうようになった時、人は、今まで生きてきた自らの人生を確認したくなるのである。しかしそれは、実は、今まで生きてきた上にあるところの現在の自己の認識への欲求でもある。しかもそれは、今こうして存在

する自分を、肯定的に捉えようとする欲求なのである。字面を見れば、いかにも現在の自分を、駄目な無意味な自分として否定的に捉えているように見えても、そこに見られる心理をよく見れば、無意味な存在のような自分ではあるが、そのような自分として肯定的に捉えようとしていることが読み取れる。

ところで、過去の自己を思い、考えることは、当然ながらそれは、回想することである。すなわち、過去は、回想というかたちで思い、考えられる。ところが、この回想というものは、過去の事実を語るとは限らない。そもそも、自分のことであっても、過去のことをすべて事実通りに記憶している人は皆無であろう。いかに自分は事実をしっかりと記憶していると思っても、そのようなことは実際にはありえないことである。自分の過去を事実通りに思い浮かべているつもりでも、事實は断片的でしかなく、実際はそうではないことが多いが、その、事実通りではないところは、自分に都合よく変化させられている。人間は誰しも自己を愛する気持ちを持っているが、過去を回想する時、その自己愛がはたらいて、自分に都合よく美化されて思い浮かべられるのである。それは、無意識のうちにそのように美化される場合もあろうし、また、意識的に美化する場合もある。つまり、現在の自己は、過去のいろいろな積み重ねの上に存在しているわけであるが、その過去のいろいろなことは美化して回想され、その結果、現在の自己が肯定的に捉えられるのである。

このように、過去を回想するとき、意識的にか否かはともかく、往々にしてそれは美化して回想される。しかし、現在の自己を肯定的に捉えたいにしても、なぜ日記などのような、みずから見るだけのものにも、過去を美化するのであらうか。

この点については、かつて考察したことがあるので、詳細はそちらに譲るが、すなわち、人がものを書く時、まず意識されるのはそれを読む人、すなわち読者である。しかし、自分以外の読者が予想されない時、人はありのままの事実通りに書き付けることができようか。例えば、日記は誰に見せるものでもなく、みずから書きとどめるものである。読者を予想していない。しかし、読者を予想していないからといって、ありのまま、事実通りに書き記すであろうか。時には自分を悲劇的に描き、時には自分をすばらしく表現する。つまり、体裁を整える。なぜそのような心理がはたらくのであろうか。それは、自分という「読者」を意識しているのである。自分のことを書き記しながらも、それを眼にする自分に対して体裁を整えるのである。すなわち、一般的な読者を予想していない時でも、人は単にありのままに書き記すのではなく、最初の読者である自己、つまり「読者たる自己」を意識して書き記すのである。「作者たる自己」が「主人公たる自己」を描く場合、「読者たる自己」が意識されるのである。

まず「作者たる自己」は「主人公たる自己」を描くが、そこには「かくありたい」と願う「作者たる自己」の気持ちをはたらいて、体裁を整えたり、取り繕ったりして「主人公たる自己」の姿をつくりあげる。しかし、その際、「作者たる自己」が単に「かくありたい」という思いだけで「主人公たる自己」を描くかという点、事はそう簡単ではない。「作者たる自己」が「かくありたい」と思う心には「読者たる自己」が意識されているのである。「読者たる自己」が意識されるゆえに「主人公たる自己」を取り繕おうとする。その取り繕われる「主人公たる自己」は、「読者たる自己」に対してこのように見せたいという「作者たる自己」の思いから作り出されるのである。複雑なようであるが、決してそのようなものではなく、これは人の心理において極めて自然に無意識的にはたらくものである。特に随筆や日記、私

小説などの自照文学においては、この「三つの自己」がはたらいっているのである。

このような心理の過程を経てなされた自己認識を綴ったものが日記である。日記が綴られる背後には、上來縷々述べてきたような心理的過程が存在しているのである。

人間には表現することへの欲求が基本的にある。その欲求は、具体的にその対象、つまり表現したものを受け止めてくれる人が明確に存在する場合もあるし、具体的ではなくただ漠然と、誰でもいいから、受け止めて欲しいという場合もある。また、受け止めてくれる人などは全く考慮の外にあり、ただ表現したいというだけの場合もあるだろう。しかし、表現したいという欲求は、誰しも持っており、自己認識についても、その欲求の範囲外のものではない。そこに日記が綴られるのである。

すなわち、上來縷々述べてきた心理的過程を経て日記は綴られるに至るのであるが、そのことを、中世の女性によって綴られた『建礼門院右京大夫集』と『とはすがたり』を対象に、確認していきたいと思う。

二

家の集などいひて、歌よむ人こそ書きとどむることなれ、これは、ゆめゆめさにはあらず。ただ、あはれにも、かなしくも、なにとなく忘れがたくおぼゆることどもの、あるをりをり、ふと心におぼえしを思ひ出らるるまま

に、我が目ひとつに見むとて書きおくなり。

われならでたれかあはれと水荃の跡もし末の世に伝はらば⁽²⁾ (一一)

『建礼門院右京大夫集』の冒頭の序にあたる一文である。もちろんこの一文は『右京大夫集』がまとめられる最後の段階で執筆されたものであり、ここにこの集の執筆理由が語られている。ここで作者右京大夫は、まず、自分の人生は「あはれにも、かなし」いものであったと述べるが、それはまた「忘れがたくおぼゆる」ものであったと言う。そしてそれらは、その折々に心に思われたことであり、それらを記すのは「我が目ひとつに見む」という目的からであった。そして和歌では、この集を見て「あはれ」だと思うのは自分だけであって、たとえこの集が後世に残ったとしても誰も私を「あはれ」だとは見てくれないだろう、しかし、所詮「我が目ひとつに見む」と思って記したものだから、それだ、と語っている。

この冒頭部分に照応する一文が、跋ともいうべき末尾に語られている。

かへすがへす憂きよりほかの思ひ出でなき身ながら、年はつもりて、いたづらに明かし暮すほどに、思ひ出でらるることどもを、すこしづつ書きつけたるなり。おのづから、人の「さることや」などいふには、いたく思ふまゝのこと、かはゆくもおぼえて、少々をぞ書きて見せし。これはただ、我が目ひとつに見むとて書きつけたるを、後に見て、

くだきける思ひのほのかなしさもかきあつめてぞさらに知らるる (三五七)

ここでも冒頭と同じような思いが語られている。すなわち、みずからの人生を「憂きよりほかの思ひ出でなき身」と

捉え、人生の大半を「いたづらに明かし暮」らしたとする。そして、それを少しづつ書き記したのだと言う。時には他人に一部分を見せたことはあったが、これはどこまでも「我が目ひとつに見む」ために記したものだと言う。そして、和歌では、書き付けたものを見ると、心が碎き散るほどの悲しさの人生をあらためて知ることだと言う。

この、ほぼ同じ内容を語るところの、序と跋に相当する部分を見ると、まず注目すべきは、この集は「我が目ひとつに見む」という目的で綴られたということである。つまり、自分だけが見るために綴ったのだと言うのであるが、それだけのことにとどまるものではない。それは、みずからの人生を確かに生きたことを、みずからの心の内で確認したいという思いを語るものである。それは、とりもなおさず、みずからの人生を確かに生きた自分がここにあると確認することである。すなわち、現在の自己を確認したいという思いが、作者をしてこの集を綴らせたのである。しかもそれは、誰かに認めてもらうものではない。どこまでも、確かな人生を生きて自分は今ここにこうしてあるということ、自分自身で確認したいという思いである。そして、そのために語られているのは、過去の自分の人生である。つまり、現在の自己の存在を確認するために、過去の自己を確認するのである。

さて、作者は過去、つまり、みずからの人生を、「あはれにも、かなしくも」あり、「憂きよりほかの思ひ出でなき」ものであったと捉えている。しかし、作者の人生がそのような辛いことばかりであったのではもちろんない。作者が建礼門院のもとへ宮仕えに上がったばかりのころには、見るもの聞くものすべてが感動の対象であった。

雲の上にかかる月日のひかり見る身の契りさへうれしとぞ思ふ（二）

これは、正月一日、さらびやかな装束でおられる建礼門院徳子と高倉天皇の美しさを天上の月と日に譬え、そのお姿

を拜見できる「身の契り」までもがうれしいと語っている。また、建礼門院や母の二位殿たちが美しく着飾っておられる姿にも

春の花秋の月夜をおなじをり見るここちする雲のうへかな(三)

と、春の桜と秋の名月を同時に見るようだと、初々しい感動を語っている。そのほか、平家の公達たちとのやりとりなど、宮中での華やかな様子に感動している。

また、平資盛との恋愛も、たしかに辛く苦しいこともあったが、それは恋愛に付きものことであって、そのような恋愛に在ること自体は楽しく幸せなことであり、それが人生そのものの辛さ、悲しさではない。しかし作者は「憂きよりほかの思ひ出でなき」人生であったと言う。ここに、過去を回想する際には事実通り綴られるとは限らないということがみられるのであるが、彼女にしてみれば、「憂きよりほかの思ひ出でなき」ものであったのである。

作者は、「思ひ出でらるるままに」(序)、「思ひ出でらるることどもを」(跋)書き記したという。つまり、共に「思ひ出でらるる」と言っていることから、事があったその時に記したのではなく、後に自然に思い出されて書き記したのである。そこにどれほどの時間差があったかはわからないが、少なくとも事があったその時に記したのではなく、後に思い出して書き付けたということである。そして、その、自然と思ひ出されたことは「あはれにも、かなしくも」あり、「憂きよりほかの思ひ出でなき」ものであった。ということは、作者にとっては、資盛を失った二十八歳頃から晩年の今に至るまでこそが自分の人生であったのである。作者にとっては、資盛が一人の人々と共に都落ちして行き、やがて壇の浦で入水して命を閉じて以後、晩年の今日までこそが彼女の人生そのものであったのである。

老ののち、民部卿定家の、歌あつむることありとて、「書き置きたる物や」とたづねられたるだにも、人かずに思ひ出でていはれたるなさけ、ありがたくおぼゆるに、「『いづれの名を』とか思ふ」とはれたる、思ひやりのいみじうおぼえて、なほただ、へだてはてにし昔のことの忘れがたければ、「その世のままに」など申すて、

言の葉のもし世に散らばしのばしき昔の名こそとめまほしけれ(三五八)

かへし

民部卿

おなじくは心とめけるいにしへのその名をさらに世に残さなむ(三五九)

とありしなむ、うれしくおぼえし。

『右京大夫集』の最後にある、この集の成立事情を記す記事である。作者が七十歳は過ぎたであろう晩年に、『新勅撰集』編纂の命を受けた定家から、書き置いた和歌はないかと尋ねられた。そして定家に「いづれの名を」用いたいかと問われた作者は、「へだてはてにし昔のことの忘」れられなかったので、「その世のままに」と答えたと言う。和歌においても、もし自分の歌が後世に残るならば忘れがたく懐かしい昔の名をとどめたいと言う。そして『新勅撰集』には「建礼門院右京大夫」の名で作者の和歌が入集している。定家の問いから、作者の女房名は一つではなかったことがわかるが、彼女にとつては、資盛死後に後鳥羽帝のおそばに再び出仕した時の女房名などではなく、建礼門院徳子に仕えた時、すなわち資盛と愛し合った時の名が、忘れたい「へだてはてにし昔」の名であり、「しのばしき昔の名」であったのである。このことは、作者が最晩年に至ってまでも資盛のことを忘れることができず、ずうっと想い続けていたこ

とを物語るものであり、まさに彼女の人生が、資盛の死後も、生涯を通して資盛と共に在ったことを如実に表わしているのである。

彼女にとって、晩年の今現在までの人生は、「あはれにも、かなしくも」あり、「憂きよりほかの思ひ出でなき」ものであった。しかし、その人生は、資盛の死後も、彼と共に在った人生であった。そして、生死に関わりなく資盛と共に生きてきた結果として、今の自分が在るのである。そのことを「我が目ひとつに見む」、つまり自分だけで確認するのである。そして、その確認された今の自分が在ることこそ、まさに資盛との愛に生きた証しである。このようにみずからの人生を捉え、みずからの心の内に現在の自分を確認することは、今まで生きてきたみずからの人生を肯定しているものであるといえよう。そのように生きた我が身を肯定的に評価しているのである。彼女には、資盛との愛に生ききつたという自負があった。たしかにその人生は「あはれにも、かなし」いものであったが、同時にそれは「忘れがたくおぼゆる」ものであった。「あはれにも、かなし」いものではあったが、彼女の人生は間違いなく資盛を変わることなく愛し続けたものであった。そういう我が人生、またそのように生きた我が身を肯定し、その結果として在る現在の自分を誇らしくも思い、みずからに確認しようとしたのが、『右京大夫集』なのである。

さて、作者は、今現在の自己を認識するために、自分が今在るに至った過去を「思ひ出でらるる」ままに回想して語っているが、回想であるがゆえにそれが事実通りではないことは前にも触れた通りである。そしてそれは、往々にして美化されるものである。

例えば、資盛には持明院基家の女という妻があった。作者は当然このことを知っていたはずであるが、資盛の命日の

記事では、

弥生の廿日余りの頃、はかなかりし人の水の泡となりける日なれば、れいの心ひとつに、とかく思ひいとなむにも、我が亡からむのち、たれかこれほど思ひやらむ。かく思ひしこととて、思ひ出づべき人もなきが、たへがたくなしくて、しくしくと泣くよりほかのことぞなき。我が身の亡くならむことよりも、これがおぼゆるに、いかにせむ我がのちの世はさてもなほむかしの今日をとふ人もがな（二六八）

と述べている。作者は、平家一門の人々と共に都落ちしていく資盛が「道の光もかならず思ひやれ」（二〇四）と後世の供養を頼んでいったことや、都落ちしていった資盛からの便りにも「申ししやうに、今は身をかへたと思ふを、たれもさ思ひて、後の世をとへ」（二一六）とあつたことを、しっかりと胸にとどめており、資盛の死を知った直後にも「後の世をばかならず思ひやれ」（二二七）と言われたことを思い出している。そのような作者は、自分が亡くなった後、誰が資盛の命日を思い出し、誰が資盛を弔ってくれるだろうかと案じ、自分しか資盛を弔うものがないと語る。明らかに虚構が見られるのである。

ところで、資盛を弔うのは自分しかないという思いは、資盛は私だけのものだと思いたい作者の、意識的になされた虚構であるが、これは「作者右京大夫」が「読者たる右京大夫」を意識して虚構を用いて述べているのであり、資盛との恋の始まりについても、同様の心理ははたらいている。作者は、宮仕え生活の中で恋に悩み苦しむ同僚の女房たちを見るにつけても、「なべての人のやうにはあらじと思」（六一）っていたのに資盛と愛し合う仲になってしまったことについて、「契りとかやはのがれがたくて」（同上）と言いつきがましく述べている。この言いつがましい物言いも、やはり

「読者たる自己」を意識してのものであるし、あの序と跋にみられる「我が目ひとつに見むとて」という言葉も、三つの自己が典型的にはたらいたものである。誰に見せるものでもないのに、なぜ「我が目ひとつに見むとて」と、言わずもがなの、言い訳がましい言葉を、それも序と跋両方に記したのであろうか。明らかに、「作者たる右京大夫」は、「読者たる右京大夫」を意識して「主人公たる右京大夫」を描いているのである。序や跋全体についても、そのような心理のはたらきを見ることができるのである。

なお、『建礼門院右京大夫集』は作者が七十歳過ぎにまとめられたものであるゆえであろうか、みずからの将来については、その思いを見ることはできない。みずからの過去を確認し、その結果である現在の自己を認識しているのである。

三

次に『とはすがたり』について見ていく。『とはすがたり』の作者、後深草院二条は、二歳で母を失い、その後は十五歳で死別するまで父に育てられたが、幼い時から後深草院にかわいがられて育ち、院も作者を「あが子」と呼ぶほどにかわいがっていた。しかし作者十四歳の時、里に下っていた作者は院の来訪を受け、むりやりに契りを結ばされてしまふ。

かくて日暮し侍りて、湯などをだに見入れ侍らざりければ、「別の病にや」など申し合ひて、暮れぬと思ひし程に、

「御幸」と言ふ音すなり。またいかならんと思ふ程もなく、引き開けつつ、いと慣れ顔に入りおはしまして、「惱ましくすらんは、何事にかあらん」など御尋ねあれども、御答へすべき心地もせず、ただうち臥したるままにてあるに、添ひ臥し給ひて、さまざま承り尽すも、今はいかがとのおぼゆれば、「なき世なりせば」と言ひぬべきにうち添へて、思ひ消えなん夕煙一方にいつしかなびきぬと知られんもあまり色なくやなど、思ひわづらひて、つゆの御答へも聞えさせぬほどに、今宵はうたて情なくのみ当り給ひて、薄き衣はいたく綻びてけるにや、残る方なくなり行くにも、「世に有明」の名さへ恨めしき心地して、

心よりほかに解けぬる下紐のいかなる節に憂き名流さん

など思ひ続けしも、心はなほありけると、われながらいと不思議なり(卷一)

前の晩はかろうじて拒否した作者も、今宵は遂に強引に契りを結ばされてしまったのであるが、その描写はあまりにも露骨過ぎる。このような描写は、雪の曙の子を出産する場面や、懐妊を示す性夢、多くの男性と契りを交わす場面など、多く見られる。

それ以後、作者は、以前から交際のあった雪の曙をはじめ、有明の月、亀山院、近衛の大殿といった男性との交渉を持った。それも、後深草院の寵愛を受けつつのことであり、時には複数の男性との同時進行も含めたものであった。華やかなと言うべきか、尋常でない男性遍歴であった。

そのような愛欲に溺れたような宮廷生活も、後深草院の後である東二条院の度々の嫉妬によって終りを告げ、結局は院に追われたかたちで御所を去る。その後作者は、幼い頃に「西行が修行の記」(卷一)を見て以来の念願通りに出家

して尼となり、憧れてきた行脚の旅に赴く。鎌倉、善光寺、熱田、伊勢、奈良などを巡り、途中、岩清水八幡宮に参詣した折に、思いがけず後深草院に再会する。

作者は、自分を御所から追放した院に対して恨みつらみはあったはずであるが、いざ院にお会いするとなると、「年月は（院のことを）心の中に忘るる御事はなかりしか」と思い、また、小袖をくださった院のお心を思うと、「来し方行く末の事も、来ん世の闇も、よろづ思ひ忘れて、悲しさもあはれさも、何と申しやる方なき」状態であったと言う。そして、立って行かれる院の残り香も「なつかしく匂い」、「夢を夢見る心地し」て、「今一度ものどやかなる御ついでもや」とは思ったが、それも憚られてよそながらお姿をもう一度拝見する。院のお姿を拝見していると、昨夜様々承った時の「いはけなかりし世の事まで数々仰せありつるさへ、さながら耳の底に」残り、院の面影は涙にかすむことであつたと言う。都へ戻る道中でも、院と再会したうれしさは、「わが魂はさながら御山にとどまりぬる心地」（以上、巻四）であつた。

つまり、この院との再会の場面では、御所を追放されたことに対する作者の院への恨みつらみは消え、ただただ、院へのなつかしさ、また再会できたことのうれしさばかりであり、院と別れた後も恋しさが募っていることがわかるのである。

その後、伏見の御所で、再び院にお会いする。そしてその後も、二見、厳島、足摺岬、白峰、松山と旅は続くが、やがて後深草院がご病氣と聞く。作者は居ても立ってもおられず今一度お会いしたいと思うがそれも叶わず、遂に崩御と聞く。「思ひまうけたる心地ながら、今はと聞き果て参らせぬる心地は、かこつ方なく、悲しさもあはれさも、思ひや

る方なくて」(巻五) 御所へ駆けつけ、誰もいない庭に一人居て昔を思っていると、折々の院の面影が今眼前にあるような気がして、何とも言いようがなく悲しい。

やがて葬送の列が出発する。作者は「履きたりし物もいつ方へか行きぬらん、裸足にて走り下りたるままにて」(巻五) 葬列の後を追う。

ここより止る止ると思へども、立ち帰るべき心地もせねば、物は履かず、足は痛くて、やはらづつ行くほどの、人には追ひ遅れぬ。……空しく帰らんことの悲しさに、泣く泣く一人なほ参るほどに、夜の明けし程にや、事果てて、空しき煙ばかりを見参らせし心の中、今まで世に永らふるべしと思ひけん。(同上)

泣きながら裸足で院の葬列を追う場面である。列に遅れながら懸命に後を追う先に火葬の煙を見上げるところなど、多分に演出の感なきにしもあらずだが、作者の院に対する思いは充分に表現されている。

すなわち、多くの男性遍歴を重ねて来た作者は、後深草院によって御所を追われた後は尼となって諸国を旅して歩いたわけだが、御所を追われたことに關して院への恨みは当然あったはずである。事実、「かくて世に経る恨み」(巻四) という表現も見られる。しかし、岩清水八幡宮で院に再会した作者には、再会した喜びと院へのなつかしき、さらには再度の再会の際にも同様の気持ちが湧いたのであって、そこには恨みは姿を消している。このことは、多くの男性との交際はあったが、作者にとって、院こそが片時も忘れることのない存在であり、心から愛し、頼みに思っていた存在であったことを物語っているのである。その証左が、院のご病気に続く葬送の場面での、悲しみのあまり体裁もかまわず取り乱した様子でひたすら葬列を追うという行動である。つまり、作者は院と再会するまでは気づかなかったが、再

会、再度の再会、そして崩御によって、自分が今まで無意識のうちにも院を愛し、院を支えとして生きてきたことに初めて気づいたのである。しかし、気づいた時には、院はすでにこの世の人ではなかった。失ってみて初めてその存在の大きさに気づいたのである。作者が御所を追放されて以後、かつて交渉のあった院以外の男性は、記事的に述べる若干の箇所を除いて、全くと言ってよいほど触れられていない。

やがて院の三回忌を迎えた後、作者は次のように語る。跋にあたる部分である。

見しうば玉の御面影も、現に思ひ合せられて、さても宿願の行く末いかなり行かんとおぼつかなく、年月の心の信もさすが空しからずやと思ひ続けて、身の有様を一人思ひるたるも飽かずおぼえ侍る上、修行の心ざしも、西行が修行の式、羨しくおぼえてこそ思ひ立ちしかば、その思ひを空しくなさじばかりに、かやうのいたづら事を続け置き侍るこそ。後の形見とまでは、おぼえ侍らぬ。(巻五)

ここで作者は、「身の有様を一人思ひるたるも飽かずおぼえ侍る」と言い、「その思ひを空しくなさじばかりに」この『とはずがたり』を綴ったのだと言う。つまり、自分の今まで生きてきた人生を心中深くに沈潜させておくことはできない、また修行を思い立つに至ったことも無駄にしないために、綴ったのだと言うのである。すなわち、「とはずがたり」とある如く、誰に問われるのでもなく、みずから語らずにはおれない思い、しかもその内容は、みずからが修行へと向かうに至った事情、つまり、自分の歩いてきた人生そのものである。すなわち、過去を振り返ることを通して現在の自己を確認しているのである。

その人生は、五十歳を目前にして初めて気付いたところの、自分の人生が無意識のうちに後深草院を頼みにし、支え

にしてきた人生であった。しかし、そのような人生であったと気付いた今、その院はもうこの世におられない。これからは自分ひとり歩いていかなければならないのである。そこで、これからの後半生を歩みだすにあたって、自分一人で歩んで行くためにも、今までの半生をみずからの目で確認し、その結果である現在の自己を認識せずにはおれなかったのである。

そしてその半生を振り返ってみると、それは院によって支えられて生きてきた人生であった。しかも、その半生は反省後悔するものではなく、確かに自分の人生であったという思いがある。つまり、決して自分の人生を否定するのではなく、むしろそういう人生であったと、そのまま肯定的に捉えていることがうかがえるのである。そして、その半生を肯定的に捉え、確認することによって現在の自己を認識し、その上で、これからの半生を今度は一人で生きていこうとするのである。これからの後半生を前向きに生きていこうとする時、誰に語るのでもないが、問われずとも語らずにはおれない気持ち、それがこの『とはすがたり』執筆の動機であり、作品名の所以なのである。

すなわち、作者は、無意識のうちにも後深草院を支えにし、院と共に在ったみずからの半生を決して後悔すべきものとして否定せず、そのまま捉えて確認し、その支えであった院を失った今、これからの後半生を生きていくべく心を新たにしているのである。

さて、先に見た、後深草院の葬列を追う場面は、あまりにも劇的である。多分に演出された表現になっているが、これは、作者の院への思いを効果的に表現するための虚構であろうと考えられるのである。また、後深草院に強引に契りを結ばせられる場面において、「薄き衣はいたく綻びてけるにや、残る方なくなり行く」と露骨に描いているが、これ

とて、作者の拒む気持ちを無視して、院がいかに強引であったかを表現するための描写であろう。極めて瑣末なことを言えば、作者と結ばれて院がお帰りになる時、院に見送りを促されて、作者は「夜もすがら泣き濡らしぬる袖の上に、薄き單ばかりを引きかけて」（巻一）見送りに出たと言うが、「薄き衣」は「残る方なくなり行く」ではなかったのか。矛盾する表現である。やはり、これも虚構が用いられているといえよう。

また、この院との新枕の後、院の車に同車して御所に戻った作者は、院と結ばれたことについて「これや逃れぬ御契りならんとおぼゆれ」（巻一）と、言い訳がましく述べている。わが子のようにかわいがられ父のように思ってきた院と男女の関係になったことを、逃れることのできない前世からの因縁だというのである。さらにまた、六条院の女樂を真似た行事で不本意なことがあったことから御所を出奔した作者だったが、迎えに来られた院の様々なお言葉に、「例の心弱さは、御車に参りぬ」（巻二）という結果になってしまったのである。

また、院以外の男性と結ばれる結果になったことについても、例えば、院に愛される身でありながら雪の曙との新枕を交わす場面において、「例の心弱さは、否とも言ひ強り得るたれば」（巻一）雪の曙は夜の御座にまで入ってきてしまったと言う。このように、「例の心弱さ」という言葉を言い訳がましくしばしば用い、やむを得なかったのだということを書外に匂わせている。また、近衛大殿にむりやり契りを結ばされた場面でも、「われ過ごさずとは言ひながら」（巻二）と、自分で犯した過ちではないと言い訳がましく述べている。すなわち、自分の意思が弱いばかりにこのような結果になってしまったと、みずからの責任で招いたことであると言いつつも、そのように語ることによって、男性の身勝手な思いの中で、やむを得ず翻弄される自分を演出しているのである。すなわち、みずからを美化しているのではあ

る。

ところで、上述の言い訳がましい物言いは、誰に対して言うのであろうか。先に引用した跋文にも、「その思いをむなくしなき」ないために記しただけであり、したがってその内容も「いたづら事」（巻五）なのであるという。これは誰に對して、みずからの書き記したものを「いたづら事」だと言いつつ、誰に語りかけるのであろうか。ここに、『建礼門院右京大夫集』でも触れた「三つの自己」がはたらいっていることをみることができるのである。『とはすがたり』も一般読者を想定して綴られたものではない。あくまでも作者二条の日記である。つまり、「作者たる二条」は、「読者たる二条」を意識して「主人公たる二条」を綴っているのである。

具体的に見てみよう。『とはすがたり』のクライマックスとも言える後深草院の葬送の場面において、作者二条はなりふりかまわず院の葬列を追う自分を確認しなかった。その気持ちは、言わば「読者たる二条」の気持ちである。その「読者たる二条」を意識した「作者たる二条」は、院の葬列を懸命に追う記事を、事実を通り越して表現した。その結果、「主人公たる二条」が描き出されたのである。院との新枕の場面でも、院と結ばれたことを前世からの因縁だと捉えたい自分の気持ちから、「読者たる二条」にそのように捉えさせるために、「作者たる二条」は「主人公たる二条」に「これや逃れぬ御契りならんとおぼゆれ」（巻一）と語らせた。雪の曙と結ばれる場面、御所を出奔した二条が院に迎えられ御車に乗ってしまった場面、他の男性と結ばれる場面などで「例の心弱さ」と表現するのも、同様に捉えることができるのである。

おわりに

如上、作者にどのような心理がはたらいて日記が成立するに至るのかということについて、まずその概要を述べ、次いで『建礼門院右京大夫集』と『とはすがたり』を対象に検証した。もちろん、それぞれの日記には個性があり、第一節で述べたことのすべての点が、どの日記にも当てはまるといえないことは当然であるが、しかし、大筋において日記というものが成立するに至る心理的背景は明らかにできたと思う。そして、そのように成立した日記が、『建礼門院右京大夫集』や『とはすがたり』のように、人間の精神的営為の表出として受容者に感動を与える時、日記文学として評価されるに至るのであるが、この心理的背景は、『蜻蛉日記』をはじめとする平安王朝期の日記文学にも大筋において当てはまる。そのことは、みずからを「女」と第三者的にみつめる『和泉式部日記』においても言い得ることであるが、それらの考察は別の機会に譲ることとする。

註

- (1) 拙稿「三つの自己」文学における作者と作品」（『同朋大学論叢』第五十五号・昭和六十一年十二月）参照。
- (2) 『建礼門院右京大夫集』は、新潮日本古典集成『建礼門院右京大夫集』による。漢数字は歌番号である。
- (3) 『とはすがたり』は、新潮日本古典集成『とはすがたり』による。